

お杉さんの伊勢まいり

岩代町

いまから千年ほどむかし、京の都に精頭せいけんという若者が、菜の花の咲く頃陸奥むちのくめぐして旅にでました。陸奥に着いたときは、もう秋のなかばで、紅葉こうようの美しい山をながめながら、杉沢すぎさわの里にさしかかりました。

のどが渴かわいた精頭は、道ばたにこんこんと湧わき出る泉を見つけ、近寄って手をさしだしましたが、泉の水に映っている娘の姿を見て、おどろいて手をひきました。年のころ十六、七の美しい娘が、愛しげに精頭を見つめているではありませんか。精頭が振り返って見ると、そこには娘はおらず、ただ、すらりとした杉の若木が一本立っているきりでした。精頭は不思議ふしぎなこともあるものだと、また泉の水を覗のぞき込みましたが、もう娘の影はきえうせておりました。

その夜、精頭は杉沢の里からほど近い新殿にいどのの旅籠はたご吉田屋に泊とまりました。精頭は昼間見た泉の娘のことを思い出し、なかなか寝つかれずにおりました。

夜半近く精頭は、隣の部屋に人の気配けはいを感じましたが、泊とまり客でも着いたのだろうと気にとめずにおりました。やがてサヤサヤと木の葉のゆれ動くような音がし、それがいつか、妙たえなる琴ことの音にかわり、すうつと間の襖ふすまが開ひらき、緑色の光がさしました。精頭は思わず、床の上に起き上がり、目をこらし緑色に輝く部屋を覗くと、美しい少女が、琴を前にして座っております。まぎれもなく泉に映っていた娘でした。

あいも見つ見られもしつつ思い川思かみうは後のおうせなりけりと娘は、琴に合わせて歌いました。それは天人てんじんのそれと思わせる、美しい声でした。精頭は思わず娘のかたわらへにじりよりました。とたんに、娘の姿も緑の光も消え、精頭は真つ暗な部屋に一人座っております